

1

説明的文章(1)——指示語・接続語

◆指導ページ P.2～5◆

【指導のポイント】

文章中における指示語と接続語について学習する。通常、説明的文章では既知の事例から推論される事柄を主張する。その際、これらの語を用いて、事例と主張をつなぎ合わせ文章にしていく。要約指示語の内容を読み取ること、接続語の役割を理解することを目指す。文章読解の基本であり、論説文や抽象度の高い文章には頻出する。指示語・接続語に注目し、論旨を捉えることを目標とする。

例題の板書例

■筆者の主張

自分の意見を曲げようとしないう頑固者

和を尊ぶ日本人

「いいかげんにしてくれよ」

(ところが)

集団にとってプラスになることもある

■事例(理由)

〈心理実験〉

・被験者が色、形、大きさ、線の種類の異なる図形を見て四種のうちの1特性を選んで答える(第一のポイント)

・被験者は周りの答えを聞くことができる(第二のポイント)

(サクラが色のことだけを答える)

色について回答する被験者が増加(中には色だけで回答する人も現れた)

■筆者の主張(まとめ)

「少数者の集団への影響力」

断固反対を貫く者がいると、それに同調する者が現れる

孤立無援であっても、信念があれば、同調者が現れる

頑固者を排除せずに、貴重な存在として受け入れる ↓ 健全な集団

重要語句

○被験者⇨試験・実験の対象となる人。

演習問題の板書例

■筆者の主張

文学の問いは正解がないように思われるが、実は問いがさまざまに分岐して別次元の問いを生みだしているはずであり、思考の継続的な運動こそが想像力の礎をなす。

■展開

文学は実生活で役に立たない ↑ 市場の現実的価値だけで見ると

文学はそのような問題の前提そのものを疑う ⇨ 問題設定の有効性を疑う

文学はフィクションによって、世の中に流通している価値観への疑念をつきつける

〈例〉善と悪：文学が描き出そうとするのは善と悪の単純な構図をこえた向こうがわ

文学は日常を裂く破壊的要素を隠し持っている ↑ 文学のおもしろさ

文学は思考と情動に深く関与する営み

文学に限らず芸術はいつも既成の制度を挑発するものにちがいない

この世界には必ずしも答えを必要としないような問いかけがある

文学こそそういうものの代表

大事なのは「上手に問う」こと ⇨ オリジナルな問いを立てること

独自性にあふれた問いであること自体、すでに「答え」が入っているに等しい

文学では、ある問いかけが答えの出ないまま時間ばかりがたっているように感じられたにしても、実は問いがさまざまに分岐して別次元の問いを生みだしているはず

そうした思考の継続的な運動こそ、想像力の礎をなす

重要語句

○違和感⇨ちぐはぐな感じで、しっくりしないこと。

## 2 説明的文章(2) 一段落相互の関係・事実と意見

◆指導ページ P.6～9◆

**【指導のポイント】**

文章は「事実・例示」、「考察」、「問い」、「結論」などから構成されている。筆者はそれを段落ごとに構成し、論旨を展開している。接続語や内容をもとに、各段落の関係を理解していくことは、筆者の主張を理解する正攻法である。ここでは、文章を構成する段落のもつ役割を考えながら、文章を理解することを目標にする。

**例題の板書例**

■筆者の主張

現代のコンクリート建築の都市計画は自然と遊離する形にあり、日本の土地利用に関する民族観に合わない。

■展開

〈日本の植生〉  
多様な植生  
① 緯度(南から北に異なる植生)  
② 急峻な地形(高度が上がると植生も変化)

世界にも珍しい緑の国土  
森林の豊かさ⇨土壌の生命力(↓強靱さ)  
自然のきめ細かさ(↓感受さ)

〈日本の農業〉  
水稲農業  
① 森林資源と土壌の豊かさへの対応  
② 自然の感受さへの対応

川の移動・氾濫が起きても、農地はすぐに回復

取り壊しも建て直しも可能な木の文化  
異質な素材と技術(↑コンクリートなどの現代の建築)

木の文化(↑敏感な自然に対応する先祖の努力の産物)

都市計画が不明瞭(自然と遊離・建設と破壊のくりかえし)  
〈日本とヨーロッパの比較〉  
ヨーロッパ:石の文化(農耕や放牧(↑自然を開拓する形式))  
⇔  
日本:木の文化

① 土壌の有機源を補う(肥料)  
② 水源を求める  
③ 水や風の被害から免れる(保水効果と防風効果)  
・自然と有機的に結びついている

■筆者の主張(まとめ)

日本の土地利用の特質は変化のある自然に有機的に結びついていくことにある。現代のコンクリート建築の都市計画は自然と遊離する形にあり、日本の土地利用に関する民族観に合わない。

○強靱⇨しなやかで強いこと。

**重要語句**

**演習問題の板書例**

■筆者の主張

化粧は社会的コミュニケーションを円滑にする重要な役割を担っている。

■展開

〈女性の化粧〉  
社会的自己を構築する、高度で知的な儀式  
・アイメイク  
目はコミュニケーションにおいて重要

〈報酬系〉  
脳内の報酬系が活発化しドーパミンが放出↓脳が喜ぶ(強化学習)  
(その行為が「クセになる」「病みつきになる」↓アディクション)  
・恋愛の強化学習(想いを寄せる人に会えば、さらに会いたくなる)

〈美の強化学習〉  
他人と目が合うことで報酬系が活発化

・鏡の自分と目が合うことでも同様に報酬系が働く

化粧をする前の自分と目が合う

尾状核(行為で得られる報酬を期待したときに働く部位)という報酬系

他者に認められる期待感や励み、意欲

前向きな女性と対面

相手に魅力を感じ、好感を抱く

■筆者の主張(まとめ)

女性の化粧は脳内の報酬系を働かせ、自己肯定感を抱かせることで対面する者にも好感を抱かせる。円滑な社会的コミュニケーションの重要な役割を担っている。

3

説明的文章(3)——要旨・論旨

◆指導ページ P.10～13◆

【指導のポイント】

説明的文章では論旨つまり、文章の主題を把握することが重要である。それは具体例を示すことで論を支えることが多い。ここでは、そのような具体例で強調される内容を捉えることに注意をおく。これを手がかりに、筆者の最も伝えたい事柄や結論、論旨を理解することを目標にする。

例題の板書例

■筆者の主張

人生で必要とされるのは、正解など存在しないところで最善の方法で対処する思考法や判断力である。

■展開

〈ある患者の診断〉

「うつ的な状態です」と診断しても受け入れず、「うつ病なんです」と言い張る

病気であれば、自分は治療されるべき対象になり、困難な状態を引き受ける必要がなくなるから

次第にももの考え方が短絡的になってしまう

現代のあらゆる問題は、キーワードだけで説明し尽くせるものではない

「簡単な思考法に逃げない」で、物事の理由を知り、受け入れようとするのが賢くなる第一歩

〈経済政策(政治や外交)〉

状況を分析し、過去の例を総動員して、先を読み最善の行動を選びとることが求められる

わからないままに受け入れ、正確に対応しなければならない

〈介護や看護などのケアの場面〉

長い目で見て患者にとって一番よい介護態勢を整える

〈芸術〉

描いた側にとって、すべての色は必然

■筆者の主張(まとめ)

人生でほんとうに必要とされるのは、一つの正解を求めるのではなく、正解などそもそも存在しないところで最善の方法で対処する、という思考法や判断力である。

重要語句

○短絡的⇨前提と結論などを性急に結びつけてしまうさま。

演習問題の板書例

■筆者の主張

劣等感とは忌むべきものではなく、ごく自然であり、劣位にある自身に向かい合うことが重要である。

劣等感と優越感の比較

そもそも両者は自分をとりまく現実の感じ方

誰しも、自分が有利であるにこしたことはない

優越感が好ましい

しかし、

〔筆者〕 まずは劣位にあるものとして自己を認識したい

〔理由〕

① 劣等感から出発して小説は書けるが、優越感をモチーフにして作品を生み出すことはできない

(劣等感)は全現実の最下位から見上げる視点であり、小説の細部の生々しさを描くことができる。優越感)は現実を俯瞰し、睥睨する意識でありそれはできない

② 悲恋、失恋の物語の方が心に深く突き刺さる

(人間の真実)は悲しみや苦悩の中に生きている

人間には劣等感を通してのみ得られる真実もある

優越感)は知らない人間は人生の半分しか生きていない

〔主張〕

劣等感)は人間への入り口であり、自己への扉である

(補足)

劣等感)から自己意識の中に埋没し、現実からの逃避をする

劣位の自己)と向き合わない⇨生きることがあまりに楽になり過ぎる

■筆者の主張(まとめ)

劣位の自己)に向き合うことは自己への扉であり、そこから得られる人間の真実がある。

重要語句

○驕る⇨地位・権力・財産・才能などを誇って、思い上がった振る舞いをする。

# 4 小説文(1)——あらすじ・場面・情景

◆指導ページ P.14～17◆

【指導のポイント】

小説文では、人物の感じたこと考えたことを読み込んでいく必要がある。ここでは、設問として問われる場面のそれに至る背景つまり、あらすじを整理する。それをもとに場面の情景が登場人物にどのように映るかを捉えながら心情を読んでいくことを目標にする。具体的には言葉や語句を例に挙げながら理解をはかる。

### 例題の板書例

■場面

合唱部でパートリーダーを務めるナニゲさんは、自分がリーダーの役目を十分に果たせていないと悩み、一人で夜の湖畔を歩いた。

■情景

河口湖畔の夜風は秋風のように涼しく、なにか郷愁にも似た切ない思いに駆り立てられそうだった

← 両腕を抱えるようにして湖畔のほうに歩いた

← 思い切り泣きたいと思った  
たまった鬱憤を涙とともに放出してすっきりしたいと思った

← 一年生を迎えた日から不完全燃焼が続き、心の中にすすのうなものが付着した

← 《おれはリーダーの器じゃないんだ》

← 先輩を見習って後輩たちの良い手本になろう、うまく引つ張ってやろうとしたけれど、叶わなかった ↑ 反省とも自虐ともつかない思い

← 公園に着くとすぐ目から大粒の涙がこぼれ落ちた

← 河口湖の向こうに富士山が黒々とそびえていた。闇の中に富士山の形を示す濃い影は、なにか大きな生き物がじっと身を潜めているようにも感じられた

← ラベンダーのさわやかな香り ↓ 心がしつとりと落ち着いてくる

← 群青色の空を行き交うたくさんの流れ星：静かなにざわい

重要語句

- 郷愁 〓 故郷を懐かしむ気持ち。
- 鬱憤 〓 心の中に積もった不平や不満。

### 演習問題の板書例

■場面

公園で私(カズ)と直斗が久々に会いおしゃべりをしている。直斗から好きな子ができたと言われる。

■情景

← 〈飲み物を片手に二人は公園に向かう〉  
(私は直斗の手をとる)

(私)

- ・ 晴れた空から降り注ぐ陽射しはあたたかく
- ・ 新緑をつけた木々がきらきら光っている
- ・ 春の匂いで満足して、花壇の花がゆれているのがうれしくて、風の音に耳をすまして優しい気持ちになる

← 久しぶりの二人の時間を楽しんでいる

← 〈近況の話をする〉

(私)

← 直斗を笑わせようとする

← 〈直斗が別れ話を切り出す〉

← 〈突風が吹いて、私と直斗の髪を勢いよくゆらした〉 ↓ 空気が変わった

5

小説文(2)——心情・人物像

◆指導ページ P.18～21◆

【指導のポイント】

前課に引き続き小説文の根幹にある、人物の感じたこと考えたことを読み込んでいくことを学習する。ここでは、人物の描写の変化から、心情の変化を捉えることを重点的に行う。またその人物がどのようないきさつでその場面にいるのかを合わせて読み取り、人物像を捉えることを目標にする。人物の描写は直接的な表現であることが多く、読み取り易いはずである。

例題の板書例

■場面

練習中に主人公(おれ)のせいでリンクで捻挫をした葵が救急病院から帰ってきた。

■人物描写

(おれ)

〈エッジケースもつけずによたよたと葵に駆け寄った〉

← 平静を失っている

おれが全面的に悪いのは明らかだった

← 自分の非を認めている

(葵)

〈ふだんとはまったく違う低くて抑揚のない声〉

← 押し黙って、怪我をしたことへのいらだちをこらえている

〈カタン、カタン、と松葉杖が乾いた音をたてて、遠ざかっていく〉

← 拒絶している

■心情の変化

(おれ)

いつもどおり許してくれると思っていた

← 甘い考えやった

← 拒絶しているが、もっと怒りをあらわにしてもおかしくない

重要語句

○ドンくさい＝間が抜けている。

演習問題の板書例

■場面

「僕」たちは「玉川祭り」の宣伝のために、ピエロに扮し、プロムナードに来ているが、「僕」は恥ずかしくて芸ができない。

■情景

小学生の悪ガキどもや若い家族連れに笑われる

← 尻込み

フジトモさんがボール・ジャグリングを始め、ムクちゃんも加わった

← しだいに観客が増えてきた

← 居心地が悪くなる

ドカが動くが、あっさり失敗して、観客から失笑が漏れる

← ・僕たちのもとに戻りかけたとき、ムクちゃんが「失敗も芸のうちです！」と言う

← ・サクラに扮したジン先生が「気合入れてがんばれ！」と声をかける

← ・みんなも拍手で応えた

← やるしかない

← 僕もディアボロを始めた

← ・基礎が大事っていうことが、いまはリアルにわかる  
 ← ・胸はまだ緊張でドキドキし、両手の動きも、なかなかほぐれないが、頭の中はすっきりと晴れわたっている＝集中

重要語句

○失笑＝おかしさをこらえられず、思わず笑ってしまうこと。

# 6 随筆文—表現・心情(登場人物・筆者)

◆指導ページ P.22～25◆

**【指導のポイント】**

随筆文は筆者の実体験をもとに書かれている。出来事の描写は、筆者の目に映るものをもとに描かれるため、「～のようだ」、「～みたいだ」といった比喩の表現が多くなる。つまりその比喩表現を読み込んでいくことが随筆文の読解において重要である。ここでは、その比喩表現に注目し、また筆者の置かれている情景なども合わせて読むことを目標にする。

### 例題の板書例

■話の舞台・テーマ  
幼いころ過ごした家の庭の端にあった井戸について

■舞台の描写  
(井戸)  
暗くて深い穴の底に、丸い水が揺れている  
〈屋根の端に青空が澄んで映ることもあった〉  
井戸の水面にそれらが映り込んでいる  
馬が水を飲みにくる

(馬)  
大きな生きもの  
幼い自分には未知のもの  
岩のようにがんじょう、立派なたてがみ、大きくて濡れたやさしい目  
肯定的に見ている

馬の身体の中に水が吸い込まれる音が聞こえた  
水が染みていったとたん、馬の全身から汗が噴き出してくる  
汗の一粒一粒が陽の光を受けて輝き、美しかった  
重労働をした馬は際限なく水を飲んでる

■今思ふこと  
あの地域は水の豊かなところであり、その豊饒のシンボルがああ井戸であった

■話の舞台・テーマ  
思い入れのある白麻のハンカチについて

■実体験  
銀座のホテルのコーヒーハウスでお茶を飲んだとき  
小柄な彼女(友人)がくしゃみをする際に、サッとコットンローンのイニシアルのあったハンカチを取り出した  
三島由紀夫の世界(昭和初期の旧家の令嬢や夫人を思わせる)  
彼女のそのしぐさはあまりに自然  
ティッシュを丸めてポイは品がないくらい  
ハンカチにこだわっていた時期(二十五歳のとき)  
白麻のイニシアル入りのハンカチを銀座の和光で買う  
大人への階段を一つ上がるための儀式(下着、ストッキングも同様)  
一つ上等のシンプルなものに変える  
混沌とした自分の心の内側も、整然と落ち着くかもしれない  
白麻のハンカチ  
① いつもアイロンを当てておかないとしわになる → 背筋が伸びる感じがする  
(常にまっすぐな様子に元気づけられる)  
② アイロンを当てること → それ自体大人っぽい丁寧な生き方につながる  
最近  
大判の厚手の無地のハンカチにひかれるが、白麻のハンカチも欠かせない  
白麻のハンカチ || 自分の精神状態を映し出すバロメータ  
(しわの伸び具合を自分の精神状態と重ねている)

### 演習問題の板書例

○旧家 || 古くから続く由緒ある家系をもつ家。  
○令嬢 || 貴人の娘。

■話の舞台・テーマ  
思い入れのある白麻のハンカチについて

■実体験  
銀座のホテルのコーヒーハウスでお茶を飲んだとき  
小柄な彼女(友人)がくしゃみをする際に、サッとコットンローンのイニシアルのあったハンカチを取り出した  
三島由紀夫の世界(昭和初期の旧家の令嬢や夫人を思わせる)  
彼女のそのしぐさはあまりに自然  
ティッシュを丸めてポイは品がないくらい  
ハンカチにこだわっていた時期(二十五歳のとき)  
白麻のイニシアル入りのハンカチを銀座の和光で買う  
大人への階段を一つ上がるための儀式(下着、ストッキングも同様)  
一つ上等のシンプルなものに変える  
混沌とした自分の心の内側も、整然と落ち着くかもしれない  
白麻のハンカチ  
① いつもアイロンを当てておかないとしわになる → 背筋が伸びる感じがする  
(常にまっすぐな様子に元気づけられる)  
② アイロンを当てること → それ自体大人っぽい丁寧な生き方につながる  
最近  
大判の厚手の無地のハンカチにひかれるが、白麻のハンカチも欠かせない  
白麻のハンカチ || 自分の精神状態を映し出すバロメータ  
(しわの伸び具合を自分の精神状態と重ねている)

**重要語句**

## 【指導のポイント】

古典とくに、古文について学習する。古文は日本語に他ならないが、文法や仮名遣いが現代の日本語と異なりそれを理解して読む必要がある。ここでは、歴史的仮名遣いと現代仮名遣いの対応を理解し、代表的な古今異義語にも触れる。また文に助詞を補うことも学習する。これら基本的事項を身につけ、古文を読解できるようになることを目標とする。

## 例題の板書例

■場面  
父と八つになった子との対話

■本文

・文法事項

「教へさうらひける」→「おしえさうらいける」

父、「空よりや降りけん、……」→父は(助詞「は」を補って読む)

・内容

ものごころのついた愛しの我が子の問いかけに窮しているが、その考えの深さを自慢したい親心がある

## 演習問題の板書例

1 ■テーマ  
棕櫚と竹を比較し、教訓を言わんとしている。

■本文

・文法事項

やがて ↓ ちょうど

ひぢをはつてゐた ↓ ひぢをはつていた

・内容

ちよつとの風にも恐れてなすままに身を任せる竹と、堂々として意志を曲げない棕櫚があった。旋風が吹いたとき、竹は頭を下げへりくだった。棕櫚は突っ張っていたので折れて根こそぎになった

〈筆者の主張〉

高慢な態度を取ると身を滅ぼし、謙虚な態度を取ると生き延びられる

2

■テーマ

継母が閔子騫の優しさにふれて感化されて、意地悪を止めた。

■本文

・文法事項

言ふやう ↓ いうよう

・内容

自身の子を産んだ継母が継子である閔子騫に意地悪をしていた。それを知った父が離縁を考えたが、閔子騫は自分だけが我慢すれば、今まで通りに生活できることを主張し、おしとどめさせた。それを聞いた継母は感じ入って意地悪を止め、実母のようになった

【指導のポイント】

日々接する言葉を、言葉の単位(文章、段落、文、文節、単語)で理解する。ここでは、文章を論理の構成から捉え、またさらに自立語・付属語の単位で理解することを学習する。暗記する事項も数多くあるが、理解して整理をし、関連づけながら頭に入れていくことを心がける。これら基本的事項を身につけ、文章の意味をよりよく読解できるようになることを目標とする。

演習問題の板書例

<p>1 清掃活動について ・「効果があった」…60.5% 準備を万端にして行ったため(担当場所の割り振り・作業内容の事前連絡) 清掃活動の手順に慣れたこともよかった ・「効果はなかった」…15.7% ← 今後は、じゅうぶんな時間配分や清掃場所に人数のかたよりが出ないように効率のよい割り振りが必要</p> <p>2 犬の鳴き声、公園のほうからしきりに聞こえる。 名詞 助詞 動詞 (*) 形容詞 犬は公園のそばの道で鳴いていた。小さい犬で、首輪をつけていた。 副詞 助詞 助動詞 副詞 どうやら、散歩の途中で飼い主とはぐれたらしい。 助動詞(推定の意) (*) 動詞 助詞 助動詞 鳴いていた</p> <p>3 活用の種類 ↓ 「ない」をつけて否定形をつくる イ段 (1) 起きない ↓ 上二段活用 (2) する ↓ サ変活用 エ段 (3) 集めない ↓ 下二段活用 ア段 (4) 書かない ↓ 五段活用</p>	<p>4 (1) 貸した    貸す + した ↓ 連用形 (2) にぎやかだろう    にぎやかだ + だろう(それが完了していない) ↓ 未然形 (3) 書くとき    書く + とき ↓ 連体形 (4) 寒ければ    寒い + であれば ↓ 仮定形</p> <p>5 連体詞: 「の」「が」「る」「な」「た」「だ」の形</p> <p>6 イ それほど暑くはなかった。 助詞 カ 冷めたご飯はおいしくない。 助詞</p> <p>7 頭括型 : 結論 ↓ 本論 はじめに結論を述べ、それを根拠立てて論証する。事例を用いることが多い。</p>
---	--